

# がんばっぺ 東北



公益社団法人 岐阜県都市整備協会

専務理事 田 口 好 介

東日本大震災から早3年、本当に月日の過ぎるのは早いものです。

原発事故の影響からか遅れていた福島県の復興も、ようやく本格的な事業着手の時を迎えること。福島県区画整理協会理事長の藁谷さんは復興手法でお悩みでしたが、今度は人材や資材不足に腐心の御様子。お手伝いできることは実に限られていて、同志として申し訳ない気持でいっぱいです。

区域の決定、権利者探しと同意取得、換地の理念など、再度の被災を防止するため高盛土で区画整理事業を計画しても、通常では計り知れないご苦労が偲ばれます。

ところが最も深刻なのは、区画整理事業が完成しても帰ってくる気のない地主が半数を超える所もあるとのこと。街づくりを標榜する我々にとってこれほど酷なことはありません。

原発事故の影響、働き場所、子供の学校や幼稚園、地震や津波の恐怖。大震災の爪痕はあまりに大きく、突然訪れた大津波から立ち直ろうともがき苦しんでこられた被災者の皆さんにとって、ことさら当然のことでしょう。

二度と津波の被害を受けないために、高台への移転や土地の嵩上げ、新技術による防潮堤の整備など多重防御の手段が、復興庁、県や市、住民の皆さんで議論されてきたと思われます。

復興事業によってあの美しい景観が少なからず変わったとしても、歴史や文化をふんだんに残す『魅力あるふるさと』、地域にふさわしい『美しい景観』、なにより『親しみあるコミュニティ』と育成された防災文化が織りなす新たな街づくりが、住み続けたいふるさと再生へと繋がっていくキーワードのように思われます。

寒すぎる冬の季節を迎え、不自由のなかで懸命に取り組んでおられる住民の方々や関係省庁の職員、工事関係者のさんは大変な思いをされています。

私たちは、日本の英知を結集して一日も早く「日本のふるさと東北」が再生されんことを祈ってやみません。